

志賀直哉「邦子」の方法—同時代言説を視座として

尹 美羅

これまで志賀直哉の小説は、主に〈私小説〉〈心境小説〉という枠組みで理解されてきた。本発表では、そのような枠組みから距離を取り、作品の構成や同時代言説との関係を洗い直すことで、先行研究とは異なる新たな読みを提示する。そのような具体的な作品の読解を通じて、既存の志賀直哉像を更新することが目的である。

「邦子」は、『文藝春秋』昭和2年10・11月号に掲載された小説である。本作品は、中村光夫の『志賀直哉論』や平野謙の「私小説の二律背反」において、志賀文学を語る上での一つの軸として位置づけられ、高田瑞穂も『山科の記憶』一系の作品について「で、志賀の創作活動の第二期を締めくくる重要な作品として取り上げた。また、多くの先行論においても、「瑣事」「山科の記憶」「痴情」「晩秋」と共にいわゆる「山科もの」の一部として論じられた経緯を持つ。しかし、これらの先行論はいずれも、本作品の題材が志賀の実生活に基づくものであることから、「邦子」の表現構造への詳細な研究は行われておらず、単一の読みに収斂するものであった。

本発表は、「邦子」を、「彼」を主人公とする一連の「山科もの」とは一線を画す作品として、志賀自身「続創作余談」で「存分に作った小説」と述べているように、「私」を主人公とする一つの構成的な作品として改めて読解することを試みるものである。

「邦子」は、「私」が妻の自殺に対する自責の念から過去を振り返るという「私小説」の体を取っており、志賀作品としては珍しく、作品内に同時代の文壇に関わる内容を取り込んでいる。本発表では、主に広津和郎の同時代言説や芥川龍之介の自殺と、本作品の妻の自殺というテーマとの結び付きとその意義に焦点を当てる。このような分析によって、「邦子」には複数の読みを可能にする仕組みがあることが明らかになる。それは私小説作家として〈神格化〉された志賀直哉像を問い直す契機となるだろう。

Reading Shiga Naoya's "Kuniko": From the Perspective of Contemporary Reviews

Yun Mira

Novels written by Shiga Naoya have regularly been interpreted in the framework of the "I-novel" (*watakushi-shōsetsu*, *shinkyō-shōsetsu*). This presentation will provide instead a new and different reading of Shiga's works by separating them from this common framework and reconsidering the structure of his works alongside remarks found in contemporary reviews. Through a close reading, this research aims to rethink the currently existing image of Shiga Naoya.

The work "Kuniko" was originally published in the October and November issues of *Bungei shunjū* in 1927. In previous research, "Kuniko" has been argued to have a pivotal role, as established by Nakamura Mitsuo and Hirano Ken, when talking about Shiga's works. Takada Mizuho also argues that this work played an important role in closing Shiga's second period of writing. Furthermore, in other research, this work has been argued to maintain its place in a specific group of works: the so-called "Yamashina works." However, previous research has argued that the content of this work is based on Shiga's life, without evaluating the structure and expression of the work, a situation which has led to a limited reading of "Kuniko."

This presentation separates the main characters of the "Yamashina works" and "Kuniko" and will read "Kuniko" with "I" as the central character in the construction of the work. In "Kuniko" the main character, "I", reflects on his wife's suicide from the perspective of self-reproach, making it rare among Shiga's works stylistically as a "framed story," and also for its references to contemporary literary circles embedded in the work. This presentation primarily focuses on the meaning of comments given by Hirotsu Kazuo and on the suicide of Akutagawa Ryūnosuke in relation to the theme of "Kuniko" as a work. Through this analysis, it is made clear that there are various possible readings of "Kuniko" by looking at the structure of the work. This also provides an opportunity to question the "deified" image of Shiga as an "I-novelist."

志賀直哉「邦子」の方法―同時代言説を視座として

大阪大学大学院 博士後期課程 尹美羅

一．はじめに

初出 『文藝春秋』一九二七年一〇月号、十一月号の二回に分かれて掲載

同時代評

(資料1) 井汲清治「十月号雑誌の文藝(三)」(『読売新聞』、一九二七年一〇月四日)
男といふ存在に潜在してゐる獸性―実は根本の本能―が、いかなる美名の下に置いても、男を動かしてゐることが、此処で具体的に描出してある。それでなまでない。アクチュアリチイでなく、リアリチイを描いてゐるとの感銘を与へているのだ。

(資料2) 片岡鉄兵「昭和二年の小説壇を顧る」(『新潮』、一九二七年二月一日)
志賀直哉氏の連月発表された「邦子」には弾力ある生活意力が溢れてゐる点で、力作である。然し、この弾力ある意力も、矢張り個人主義的精進に限られたものである。(中略)けれども、斯る精進が個人を如何に成長させようとも、現代の切実なる問題とはなり得ない。

▼発表当時から〈私小説〉的読みがなされていたことがうかがえる

先行研究

①作家志賀直哉の転換期における作品

(資料3) 中村光夫「邦子」(『志賀直哉論』、文藝春秋新社、一九五四年)

彼はこの事件の「心的経験」に取材した「邦子」を昭和二年に書きあげ、翌年にはさらにその副作物である「豊年虫」を発表したのち、昭和八年の「萬曆赤絵」までほぼ四五五年の沈黙期に入ります。

(資料4) 高田瑞穂「『山科の記憶』一系の作品について」(『国語と国文学』第四八巻第六号、一九七一年六月)
「山科の記憶」一系の作品の後、同じ素材を存分に作った『邦子』の書き終えられた昭和二年の夏のころまでで、直哉の第二期に相当する作家活動はほぼ終る

②「私」(志賀直哉)の女性観

(資料5) 志賀直哉「続創作余談」(『改造』、一九三八年六月)

此小説は或人々に好かれ、或人々には好かれてゐない。女に対する考へ方で分かれるらしく、大体所謂フェミニストの傾向ある人々には此小説は愉快でないらしく、その反対の考へ方をする人々には同感を得るらしい。

(資料6) 永井善久「ナオミと邦子―女性・文学・商品」(『明治大学日本文学・二四号』、一九九六年六月)
邦子を「純粋な」女に祭り上げることで自殺の原因の一端を邦子の性情に帰し、自己の責任を軽減しようとする希いこそが、「私」に筆を取らせた自覚されざる動因だったのかもしれない

▼「私」の語りが邦子の精神的な「弱さ」を強調しようとしていることを指摘し、そこから「私」の男尊女卑的な意識を見出す

▼「邦子」を〈山科もの〉に次ぐものとして位置づけ、「私」の女性観を志賀直哉の女性観と結びつける傾向を見せる

③〈私小説〉（モデル小説）としての読み

（資料7）平野謙「私小説の二律背反」（『文藝読本・理論篇』、昭和二十六年一〇月）
そういう作家的実状をもっとも明瞭に物語っているのが、やはり志賀直哉の『邦子』一篇にほかならない。（中略）重要なことは、志賀直哉という一個強靱な生活者が『邦子』を書くことによって、一芸術家としての生活的危機を切りぬけ、卒業していった過程にある。

（資料8）古川裕佳『志賀直哉の〈家庭〉―女中・不良・主婦―』（森話社、二〇一一年二月）

そのような物語内レベルでの登場人物の抗争を確認した上で、それがメタレベルでの作者と文壇との抗争に反映するさまについて考察する。（中略）「私」の物語を失敗に追いこんでいく、そのような作品の機構に作者・志賀直哉の小説への意志がはつきりと刻印されているのだ。また、こうした機構を問題にすることによって、芸術家としての「私」の抱える問題に光を当て、文壇小説としての読みへの道筋を見つけることができるようになるだろう。

▼「私」の物語を通して、執筆当時の志賀と文壇との「抗争」を重ねている

（資料9）志賀直哉「続創作余談」

「邦子」は前の材料での心的経験を素に、存分に作つた小説。或る程度に打込んで書く事が出来た。

【本文1】冒頭部

然し私として文筆を業とする戯曲家である以上、只自分の愚かさをのみ避難し、悔恨の情に包まれてゐても仕方がない。

▼「邦子」が「存分に作つた小説」であること、語り手「私」が「戯曲家」であること、掲載媒体との関係性などが看過されている

二.『文藝春秋』とのかかわり

二.一.『文藝春秋』一九二七年一〇月号（創作号）

・「邦子」をはじめ、岡田三郎の「夏の一齣」、中條百合子の「帆」、芥川龍之介の遺稿「歯車（遺稿）」を掲載
・前月の『文藝春秋』が「芥川龍之介追悼号」の特別号だったことに続き、同月号にも芥川の遺稿が二作掲載され、広告や他の誌面にも芥川への追悼意識がうかがえる号となっている

【本文2】冒頭部

邦子が自殺した事は何といつても私の責任だ。（中略）その邦子がどうして三人の子を残し、自殺したか、これは恐らく他人には解らない事だ。外見はよくしてゐながら私が余程残酷に邦子を扱つてゐたか、或ひは邦子が心にもなく発作的に自らを殺して了つたか、その何方かに考へるより仕方ないだらう。（中略）「誰もまだ自殺者自身の心理をありのままに書いたものはない」ある自殺者の手記にもかうあるが、まして当事者ならぬ私にそれが掴めないのは当然だ。

▼芥川龍之介「或旧友へ送る手記」は『文藝春秋』同年九月号に掲載された

（資料10）志賀直哉「続創作余談」

終りの説明は蛇足であらうといふ長與の忠告で、此全集では仕舞ひを十数行去つてみたが、その為め少しはよくなつたかも知れぬ。

▼『志賀直哉全集・第五巻』（『改造社』、一九三八年四月）に収める際に、削除され、以降も踏襲された。

（資料11）「邦子」初出の作品末尾

私は邦子は何故そんな事をしたか最初分らなかつた。邦子の遺書でも、それは明らかでなかつた。恐らく自分でもよく分らなかつたに違ひない。邦子は遺書で、自分がさう云ふ事を決行する不埒を詫び、後に子供達にも申し訳ないと書いてみた。（中略）そしてこの事が邦子には大きな不安となつたのではなかつたか。（中略）邦子は段々大きくなつて行く不安を負ひきれなくなつた。それを云ひたかつたらうが、寄せつけない態度を示してゐるので、弱い性質から打明けられなかつたのだ。（中略）私は早く此記憶から遠退きたい。実際邦子のやうな純粹な氣持を持つた女の良人となる資格は私にはなかつたのだ。

（資料12）芥川龍之介「或旧友へ送る手記」、『文藝春秋』、一九二七年九月

自殺者は大抵レニエの描いたやうに何の為に自殺するかを知らないであらう。それは我々の行為するやうに複雑な動機を含んでゐる。が、少くとも僕の場合は唯ぼんやりした不安である。何か僕の将来に対する唯ぼんやりした不安である。（中略）僕は何ごとにも正直に書かなければならぬ義務を持つてゐる。（僕は僕の将来に対するぼんやりした不安も解剖した。それは僕の「阿呆の一生」の中に大体は尽してゐるつもりである。

▼芥川の遺稿が引用されたことに對し、邦子の自殺前に書いた遺書は直接引用されない代り、その内容が「或旧友へ送る手記」を思い出させるものとなっている

▼積極的に『文藝春秋』読者による複層的読みを誘うもの

CF:志賀直哉「沓掛にて―芥川君のこと―」、『中央公論』、一九二七年九月号²。

▼志賀は芥川の死を「七月二十五日の朝、信州篠の井から沓掛へ来る途中で知」り、作品末尾には、「（昭和二年七月三十日）」と執筆年月が明示されていることから、芥川が自殺した（七月二四日）直後の執筆であることが分かる

（資料13）志賀直哉書【書簡…四九四】一九二七年七月三〇日（『志賀直哉全集・第十二巻』、岩波書店、一九七四年）

芥川君の事少し頭についてゐてよくない。若山 小見寺 山川君によろしく

（資料14）志賀直哉「続創作余談」

信州沓掛の千ヶ瀧のホテルで前半を書き、戸倉といふ温泉に移つて後半を書いた。

¹ 原題の表記は「沓掛にて―芥川君の事―」である。

² 同号も、芥川龍之介の死とその芸術についての特集が組まれており、大山郁夫・生田長江・有島生馬・高畠素之・武者小路実篤らが寄稿しているが、志賀の作品は、特集記事には含まれず、独立した扱いとなっている。

▼志賀は、「信州沓掛の千ヶ瀧のホテルで」「邦子」の前半を書いており、芥川の死の衝撃からなかなか抜け出せないまま、「邦子」の執筆に入っていることが窺われる

二・二『文藝春秋』一九二七年一月号（戯曲号）

・前月号に続き、芥川への追悼意識がうかがえる号となっている
・戯曲号として、金子洋文の「天井の罌」、村山知義の「カイゼリンと歯医者」、北村小松の「活動狂時代」、水木京太の「三十日の月」、関口次郎の「稲妻」、岸田国士の「ガンバハル氏の実験」、長田秀雄の「幸福な父」など、多くの戯曲やラジオ・ドラマに続いて、「邦子」が掲載されている

（資料15）菊池寛「編輯後記」『文藝春秋』一九二七年一〇月号

来月号は例年通り「戯曲号」として、少なくとも六七篇は掲載し、本号創作の埋合せをする。然し志賀氏の「邦子」の続篇は勿論来月号に連載する。寡作の志賀氏からかかる雄篇の載けた事は感謝に堪えない。

（資料16）志賀直哉【書簡…五〇三】一九二七年九月二〇日

私は時々退屈して弱る事あり早くかへりたくなりました、暗夜行路十七枚十一月号分を仕上げ 今は文藝春秋の方を書いてゐますが、（中略）

▼本号が「戯曲号」であったことは、周知のことであつたことがうかがえる

▼「私」が「戯曲家」として設定されていることは、これまでに看過されてきた点であるが、同時代的読みを促すもの

▼戯曲号に掲載される作品後半において、1.「私」が「戯曲家」であることが繰り返し強調され、2. 会話文の割合が非常に大きくなること、3.「平穩無事な月日」の反復だった物語が、急に浅間雪子との不倫を経て邦子の自殺に至るという劇的展開を見せるのは、『文藝春秋』誌面全体を意識したものなのでは？

三．おわりに

【本文3】冒頭部

私は私の不幸事（「邦子の」と云はず、敢へて「私の」といふ）を書くつもりだが、今、濛々と頭に燃えいぶつてゐる色々な考へが、書く事で幾らかでも整理出来れば私は足れりとする。

▼「邦子」というタイトルであるにもかかわらず、自分の物語を（戯曲的）な方法で織り出す語り手「私」が浮き彫りになる構造

▼モデル小説ではない（私）小説としての読みが可能である

戯曲家「私」が（戯曲的）に描く（私）の物語↓志賀直哉が創作する小説作品の（私小説）的受容

▼物語内容が作者の実生活に重ねられるというより、「私」の語りの方が作者志賀直哉の方法としてなぞらえるものになっていることから、同時代評や先行研究の（私小説）的読みを誘導する形となったのでは？